

第4回日韓共同学術会議の報告

第4回日韓共同学術会議「日本と韓国における文化と政治：伝統・近代・ポストモダン」（主催：政治思想学会／共催：韓国政治思想学会、助成：（財）社会科学国際交流江草基金・（財）日韓文化交流基金）は、2005年5月14～15日の二日間、京都大学百周年時計台記念館（大ホール）で開催された。参加者は、14日（土）60余名、15日（日）50余名だった。参加者数はさほどではなかったが、日韓の報告についての質疑・討論は、誤解・対立・齟齬をはらみながらも、回数を重ねることで、しだいにかみ合うようになってきたという印象を強くもった。以下に、会議のプログラムとともに、各セッションの内容を出席者が紹介したものを掲載する。

なお第5回の共同学術会議は、韓国政治思想学会の主催により、2006年5月19～20日の日程で行なわれることが決定した。テーマは「東洋と西洋の政治思想における正義観」である。

（記・米原謙）

5月14日（土）

開会挨拶（12：30～13：00） 小野紀明・政治思想学会代表理事／張東震・韓国政治思想学会会長

I 近代化と伝統の役割（13：00～15：30）

司会：出原政雄（同志社大）

松田宏一郎（立教大）「近代東アジア政治思想における生物学的メタファーと伝統的概念」

金鳳珍（北九州市立大）「朝鮮の近代化における〈伝統の発明〉——朴殷植の民族主義の形成と変容」

申福龍（建国大）「韓国における近代化の葛藤——祭祀問題とキリスト教の衝突」

ディスカッサント：李東秀（慶熙大）、朴鴻圭（高麗大）、飯田泰三（法政大）

II 植民地統治期における文学と政治

（16：00～18：00）

司会：李静和（成蹊大）

川村湊（法政大）「韓国近代批評と植民地状況」

崔丁云（ソウル大）「植民地朝鮮における近代的主体の導入」

ディスカッサント：全敬玉（淑明女子大）、飯田泰三（法政大）

5月15日（日）

III 戦後社会とフェミニズム研究

（9：30～11：30）

司会：関口すみ子（法政大）

片野真佐子（大阪商大）「日本における女性観の変遷——近代皇后像を手がかりに」
全敬玉（淑明女子大）「韓国における性政治学」

ディスカッサント：崔丁云（ソウル大）、岩本美砂子（三重大）

IV 西欧近代思想における文化と政治：

ルソーをめぐって（13：00～15：00）

司会：高野清弘（甲南大）

山本周次（大阪国際大）「ルソーの共和主義——その特質と日本的受容」

金容敏（韓国外語大）「韓国におけるルソーの受容——「告白録」を中心に」

ディスカッサント：張東震（延世大）、吉岡知哉（立教大）

V ポストモダニズムにおける文化と政治：

アレントをめぐって（15：30～17：30）

司会：千葉真（国際基督教大）

川崎修（立教大）「ハンナ・アレントと日本の政治学」

李東秀（慶熙大）「ポストモダン政治の可能性」

ディスカッサント：柳弘林（ソウル大）、伊藤洋典（熊本大）

I 近代化と伝統の役割

まず松田宏一郎の報告は、19世紀末東アジアに進化論や Social Darwinism が導入されたときに、東アジアにおける「身体としての政治社会」観がその受容の基盤をつくっていたのか、それともまったく新しい身体観と国家観が必要となったのかを問う。松田によれば、中世の西洋の国家観では「頭としての君主」がいるが、東洋の董仲舒や『黄帝内経』などでは、「心 mind（哲学的には、身体に充満する形のないエネルギーのようなものとしての）と心臓と君主が結びつきやすい組み合わせ」として認知されていたという。日本では、18世紀後半に蘭学が広まってから「心」の所在が臓器や神経の機能に関する解剖学的知識と関係づけられる（河川信任・杉田玄白・三谷公器など）が、「明治初期の思想家が、西洋の社会有機体論を理解するときには、まったく新しい人間観や身体観を同時に導入したと考えるよりも（中略）いくつかの身体観のパターンから使えるものを使って選択した」と答えている。しかし、明治末期の建部遯吾などは西洋の思潮に従い、「人間の身体のアナロジーではなく、生物一般への比喩に移っている」ので、精神活動の所在を云々する議論はされなくなり、「身体論的国家観の関心は、むしろ無形の神秘的な『生命力』に移動してしま」い、そのことが豊かな思想的成果をもたらしたとはいえないと指摘した。

金鳳珍の報告は、伝統の「発明（invention）」という概念に着眼し、「発明される、創り出される、捏造される」三つの範疇の外延としての「発現される、変容される」「歪曲される」伝統として、朴殷植のナショナリズムに注目する。朴殷植は、「故国の独立・古地の回復」のために、『韓国独立運動之血史』『韓国痛史』『夢拜金太祖』などで「民族主義史学」「忠国愛族」の英雄、英雄史

観」を「発明」する。また朴は、「儒教的ナショナリズム」を「発明」したが、その際、他者への過度な模倣は「敵対的な『共犯関係』」をもたらしたとされる。朴殷植の「発明」において、朝鮮近代史の諸事件への評価は一貫したものではなく、普遍主義を特徴とする儒教は、批判の対象であると同時にナショナリズムと併進しており、一種の矛盾語法（「変容」）をなしている。

申福龍の報告は、18以来祭祀と位牌を偶像崇拜とみなす教皇庁の西欧的な視角が、18世紀末以降の韓国のキリスト教受容史にどのような桎梏をもたらしたのかを、朝鮮でのキリスト教迫害事件およびキリスト教信者が教会から離れようとする傾向から解明し、マテオリッチのような初期のゼスウィット伝教師から伝統と近代化の共存の可能性を模索する一方、伝統否認の近代化という韓国の近代化への反省を促している。

この三つの報告に対しては、「心臓を血液循環の器官・コミュニケーション器官」として見るべきではないかという疑問（松田報告に対して）、「敵対的な『共犯関係』」という分析への批判（金報告に対して）、「韓国ではキリスト教が『儒教』と衝突したが、日本では『国体』と衝突した」というコメント（申報告に対して）がなされた。

三つの発表が共通に提起するのは、近代化の流れのなかで色褪せ、あるいは変容・否定されてきた「伝統」を再吟味することであろう。それは E. Shils が *Tradition* で発した「伝統とは何か」という問いと共通する課題でもあると思える。

【文責・魯炳浩、京都大学大学院】

II 植民地統治期における文学と政治

川村湊の報告では、植民地朝鮮の俊英の英文学者崔載瑞が紹介された。川村は植民地朝鮮の近代文学を日本経由の「移植文学」としたうえで、「直接的で現実的な文学理論を受容しようとする動き」として、崔載瑞がイギリスの象徴主義文学理論を学び、朝鮮の文学の世界に直接的な西欧近代文学の「文芸理論」「文芸評論」を確立しようとしたことを挙げている。

しかし、植民地という環境のなか、崔載瑞が学んだ E. S. エリオットの「伝統と個性」での「伝統」とは異なり、朝鮮人としての崔載瑞の「歴史的意識」と「個人の意識」は、矛盾し、背馳する。エリオットのアメリカからイギリスへの「移動」は、崔載瑞には、強制的伝統文化としての日本文化——日本語——のみならず、「個人」や「個性」をもまた被植民地人としてのそれに置き換えさせるような強制力として現われる。崔載瑞が師の佐藤清の「自国文学のための外国文学」論を受容したならば、崔載瑞の英文学研究は「朝鮮近代文学のために資するものでなければならないし、彼の文芸評論や小説の創作活動は、朝鮮文学に属するものとして実践されなければならなかったはず」だが、崔載瑞は国家総動員体制が強化された1940年代、個人主義否定から全体主義、国家主義に転換する。例えば「まつろふ文学」で、日本という国家体制への痛々しいマゾヒスティックな帰順を行っているのである。このような変貌は、「移植文学史」における一つのエピソードであり、文学の「意味」そのものに関わる問題だと、川村は語る。

崔丁云の報告では、1910年の日韓併合により朝鮮での民族運動は公式的な大衆動員と闘争としては出来なくなり、隠蔽が可能な方式すなわち新聞の連載小説という形で現われたという。二つの類型の近代西欧型主体の導入がそれである。まず李光洙は1933年朝鮮日報に発表された『有情』で、男女間の愛・欲望が肉欲や憎悪ではなく、民族愛または社会の普遍的な温情に転換されうる、近代西欧の典型的な浪漫主義的な主体として植民地朝鮮でのゲーテのウェルテル崔哲を画いている。また、崔丁云は1928年から1940年までのおよそ12年間朝鮮日報に連載された、碧初洪命熹の『リンキョセイ (伝)』を紹介しているが、そこでの主人公リンキョセイは、友達と群れをなして外敵のみならず朝鮮の支配層とも絶えず闘う社会最低層の反知性主義的民衆英雄であった。リンキョセイの旅程は、ゲーテのファウストそのものなのであり、「民衆」の仮面を被って現われたが、自己自身を否定する植民地知識人の仮面だったのであ

る。

このような理性と欲望は20世初から朝鮮の開化知識人が朝鮮人に植付けようとした主体性であったし、二人の主人公は開化知識人の完成品であった。また、この二つの主体は滅亡した王朝の廃墟に共和国を起こした「韓国人」の祖先で、隣国日本の植民地に転落した怨恨が呼び起こした亡霊で、伝統の懐から離れた長い放浪の報償であったと崔丁云は語っている。

この二つの報告については、各々「政治より文学を見ようとしたのではないか」(川村報告に対して)、「日本の場合、自然主義文学の段階で自我・主体の問題が起ったが、民衆英雄的な主体の導入はなかった」(崔報告に対して)などのコメントがあった。

この二つの報告は、両者ともに植民地朝鮮の文学者をどう見るべきかという問題につながっているが、同じ対象を見つめる日韓両国の立場が同一だとは見えず(それがよいことだとは言いきれないが)、一層の研究の必要性を痛感した。ただ、「政治」と「文学」において、「政治」が「文学」のために無視されたり、「政治」のために「文学」が無視されてはならないことと、韓国で植民地朝鮮の知識人・文学者を分析する際、より多様な視角からの分析が要求されることを述べておきたい。【文責・魯炳浩、京都大学大学院】

III 戦後社会とフェミニズム研究

片野真佐子報告は、日本における女性観の変遷を、近代皇后論を媒介として展開しようとするものであった。明治・大正・昭和の歴代皇后の、時代の先端を行く存在としての姿を論じながら、国民の心根を国家へと吸収していく装置として、皇后の役割が大きいと強調した。日本人の美の結晶とも言える歴代の皇后たちの美しさ、けなげさが、国民の心を打っただけでなく、皇后たちの苦惱こそ、国民を惹きつけて魅了しつづけたと言う。こうした国民の母としての皇后像を、守旧的な後宮改革の先駆者美子(昭憲皇太后)、一夫一婦制度の実質的に確立した節子(貞明皇后)、戦時の戦没者と遺族に慰めの言葉を送る皇后良子、

そして戦後復興のシンボルとしての現皇后美智子と特徴づけ、順次、検討した。また昨今の「女帝」問題にも言及したものだ。

全敬玉報告は、まず、近年韓国の政治学における性（Gender）への関心の高まりを指摘し、その文脈において、韓国の大学での女性学の設立、研究主題としての一般的な女性管理者のリーダーシップなどをとりあげ、さまざまな研究成果を紹介しながら、その意義を強調した。そして、女性の人権侵害の問題（脱北難民問題、従軍慰安婦問題）は政治的な問題でありながら、社会構造的な問題としての意義をもっており、こうした韓国におけるフェミニズムの議論が、社会認識論での平等なジェンダーの構図を発展させると主張したものだ。

このセッションでの報告では、一方は皇后の政治的社会的役割を分析することによって、日本におけるフェミニズムの研究の一端を示すものであり、他方は、韓国における性（Gender）政治学の研究を概観して、その社会的意義を強調したものである。片野報告に対しては、皇后を選ぶプロセス、天皇と皇后との教育の違いなどについて質問があった。全報告に対しては、「性」という言葉はもともと儒教の根本概念であるが、「性政治学」という言葉の使用は儒教的価値観と衝突することはなかったのか、などの質問があった。フェミニズムの研究は日韓両国においてきわめて遅れているという状況の中で、語彙のニュアンスの差異の問題や、政治過程の中で女性の権利がどのように扱われてきたのかは、今後も日韓共通の注目すべき課題だと思われる。

【文責・胆紅、大阪大学大学院】

Ⅳ 西欧近代思想における文化と政治：

ルソーをめぐる

山本周次報告は、日本におけるルソー受容について、明治期の翻訳、政治的実践、戦後の学問研究という三つの局面を取り上げた。ルソー生誕200年祭には、堺利彦らの社会主義者と三宅雪嶺らの自由主義者が参集したが、このような幅広い連合を可能にしたのは、中江兆民による「共和主

義の先駆者」というルソー像であった。この場合の共和主義は単なる君主制の対語ではなく、より実質的に、人民の自治ないし法の支配に基づく国制を意味し、共和制と君主制の両立可能性をも排除していないことが重要である。兆民が鋭く洞察していた共和主義のこの含意こそ、戦後のルソー研究が見失った次元であり、共和制と民主制との緊張関係も忘却されていくのである。戦後民主主義の中での学問的深化が必ずしも政治的思考の成熟を意味せず、むしろ自らの視野を狭めてしまったことを、山本報告は示唆したように思われる。

金容敏報告は、ルソーにおける「セクシュアリティ」の概念を『告白』に焦点をあわせて検討した。人間本性の根源をなすセクシュアリティは、他者への欲望を通して自意識と社会性を生み出す源泉であるが、そこに働く奔放な想像力を理性によってうまく統制することができたとき、両性の結合によって安定的な家族共同体が形成され、『社会契約論』に描かれた理想的な政治共同体も可能となる。金氏によれば、このようなセクシュアリティの発現と変容の過程は、『人間不平等起源論』では「一般的人類の歴史」として、『エミール』では「普遍的個人の歴史」として、『告白』ではルソーという「特別な個人の歴史」として描き出されており、これらを一つの全体として捉える視点が、ルソー哲学の理解にとって不可欠なのである。

ルソーその人が多様な自我の束であったように、そのテキストもまた複数の読みに開かれていることを、両氏の報告は改めて感じさせるものであった。ルソーを読む際の政治的コンテクストは日韓でかなり異なっているが、結局、そこからいかなる「共同体」の構想を導き出すのかによってルソー読解のベクトルは定まるのであり、これこそ読み手が最も自覚的でないといけない点であろう。

【文責・長谷川一年、同志社大学嘱託講師】

Ⅴ ポストモダニズムにおける文化と政治：

アレントをめぐる

川崎修報告は、永井陽之助、阿部斉、藤田省三

による三者三様のアレント解釈を取り上げた。永井がアレントから読み取ったのは、公私の対立を失ってすべてが社会化した国家が全体主義をもたらしたのであり、政治と非政治の峻別に基づいて政治権力を限界づけねばならないという示唆であった。それは当時の冷戦文脈において、広義の社会主義に対する批判を含意していた。一方、ギリシア的な公共性ないし政治的自由に関するアレントの議論に注目した阿部は、それを今日的に再生することに努力し、永井とは対照的にアレントにおける参加民主主義の側面を重視した。藤田は不安定性の絶えざる創出というアレントの全体主義論を「生活様式における全体主義」という独自の形に展開させ、現代市場経済への批判的視点を打ち出した。それ自身を存立させている制度的手段（例えば通貨）を含めて、すべてを流動化・不安定化させる市場経済に、藤田は政治的全体主義と同型の論理を見たのである。

李東秀報告は、プラトンからマルクスに至る近代の政治観を超える「ポストモダン政治」の思想家としてアレントを読み解いた。近代政治は「権力政治」(politics)であり、多くの政治理論は利害対立の調整を模索してきた。だがこうした「調整としての政治」では、権力政治を止揚することはできない。それに対して、活動と言葉を通して共同世界を構成することに政治の本質を見るアレントの議論は、「協力としての政治」という新しい地平を示唆している。究極的には暴力によって担保される支配関係に代えて、人々の多様な意見が協同して織り成す共同世界を構築すること。ここに李氏は、近代の権力政治を超える「コミュニケーション政治」(the political)の可能性を見出したのである。

韓国では、アレントはマルクス主義に代わって、市民運動を方向づける理論として読まれつつあるようだが、ポストモダンの観点からのアレント解釈はまだ多くないという。他方、川崎氏が最後に触れたように、日本ではむしろポストモダンの解釈が活況を呈しており、李報告が違和感なく受け入れられる素地が整っている。しかし、そうした解釈を一過性の流行に終わらせないために

は、李氏のいう「コミュニケーション政治」の内実をさらに理論的に究明する必要があるだろう。

【文責・長谷川一年、同志社大学嘱託講師】